

回復系聖女に憧れた子
がバーン様みたいにな
っちやった件について

リーグロード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

憧れの小説の主人公と同じ回復系聖女を目指して転生したはずが、何故か最初に助けたおじさんが魔王だった。

どうしてこうなった!!?という思いを秘めながら、新生魔王城のカーテンの後ろから黒幕としてバーン様みたいに日々を過ごしていく。

いつか勇者たちに「今のベホマではないホイミだ……」という台詞を言う日がくるのだろうか？

高評価と感想が多ければ続編を執筆します！

目次

異世界で魔王を助けてみた	1
勇者VS魔王（負けイベント）	15
新生魔王軍幹部登場	43
希望の勇者の後継者	70

異世界で魔王を助けてみた

昨今のラノベでは冒険ファンタジーだけではなく、悪役令嬢転生やオタクとギャルの恋愛モノを描いた作品も数多く存在する。

他にも勇者という華々しい職業だけではなく、聖女や賢者といった2番手だけでなく生産や補助の職業にもスポットが当てられてきた。

そして、最近の私の愛読書は『異世界転生したら回復チートの聖女でした!?!』という通称『回聖』という作品だ。

物語の始まりはお決まりのテンプレで神様から戦闘系チートではなく回復系のチートを貰って異世界に転生するんです。

そこから異世界の王国の王子様やイケメン商人やイケメン騎士なんかとラブコメを繰り広げながら敵国との陰謀に立ち向かったり、同じ異世界転生者と直接対決したりなんかとハラハラドキドキの展開のオンパレードで、今の私の一押しなんです！

そんな私なんですが、学校からの帰り道で赤信号を無視して突っ込んできた黒のワゴン車に跳ね飛ばされて地面に頭から逝ってしまいが臨終してしまっただけです。(いや、そこはトラックじゃないんかい！)

唯一の救いは即死だったので痛みをあまり感じることなく死ねたことぐらいですかね？

それから気がつくのと目の前に神様が御光臨して異世界転生へのチャンスをくれたのです。(ちなみに、神様は白髪細目の超イケメン)

何故くじ引きだったのかは今でも疑問ですが、私は前世の分の幸運を全てつぎ込む勢いで箱の中に入っているクジの1つを取ったら、異世界転生&特典2つという私的に超大大当たりを引いて神様からおめでとー！ とクラッカーを鳴らされました。

さて、ここで私が引いた特典2つは何を望んだか大体の人ならば予想出来ているんじゃないですか？

そう！ まずお願いしたのは回復チートだ。具体的には生命停止から3分以内の蘇生から、同時に1000人まで重症レベルの傷の治癒に、私から100km以内の対象の干渉という、まさにチートと叫ぶに相応しい内容を願ったらあっさりOKして貰った。

2つ目は悪い人なんか利用されない程度の強さもとりあえず欲しいです！ とお願いすると、これまた二つ返事でOKを貰えた。

そうして異世界転生する前の準備は完了し、私は新たな人生を歩むこととなった。

私は神様からチートを授かり魔法陣で見知らぬ森の中へと転移させられた。

「さくて、とりあえず異世界っぽい場所に転移したけど、ここ何処だろう?」

何やら遠くで城のような物も見えるし、ひとまずはあそこに行けばいいのだろうか?

ラノベの展開的にはああいう城に行けば何らかのイベントが発生するのがお決まりだが、この世界でもそうなるのだろうか?

「まあここで考えてもしょうがないし、なんたって私にはチートもあるから大丈夫よね」
「♪」

こんな何もない場所で考えるよりも城を目指して歩いた方がいい!という結論に達した私は城を目指して歩き出した。

そのまま城を目指し始めて10分もしないうちに自らの異変に気がついた。

「全然疲れないし、体が浮くように軽い!」

普段のアスファルトで舗装された道と違ってガツタガタな砂利道を歩いているのに苦勞するどころかスキップしてしまいくらいに余裕に感じられる。

「まさか!?! これは2つ目の特典の効果なのでは!!」

そう言えば悪人に利用されない程度の強さという抽象的な表現だったから具体的に自分がどれ程強くなったかのは分からないままだ?

そもそも悪人の定義によって強さが変わるのではないだろうか？

例えば、チンピラなら街で強い程度だが、もしこれが魔王なんかが悪人とすれば今の私の強さは勇者並みに……………

「はは……、まさかね……」

乾いた笑みをこぼしながら道を歩いていると、なんと道端に倒れている人を発見してしまった。

慌てて近寄ってみると、まだうめき声を出しているので死んでいる訳ではないようだ。

だが、地面にはかなりの血だまりが出来ており、素人目でも危険な状態だと分かる。

「ぐっ…………おのれ…………我が…………野望が…………」

何か喋っている様だが、こんな状態の人を今まで見たことがないから私はパニックになつて気が付いていなかった。

もしこの時に少しでも冷静さがあつたならば、私の未来はきつと変わっていただろう。

「えつと…………、どうすればいいんだろう？ 回復魔法なんてまだ使ったことないし、えー

い！ やらずに後悔よりもやって後悔！ 回聖の主人公の技お借りします！」

我が祈りは救済の光

「ぬっ?! おおっ——!!!」

私の体から緑色の眩い光が出たと思えば、その光が倒れているおじさんに纏わりついて傷口がきれいさっぱり無くなっていった。

さつきまで乱れていたおじさんの呼吸も安定しだしてゆき、ついには自分の力で立ち上がった。

「し……信じられん!? あの勇者に斬られた傷がこうも一瞬で回復するとは……」

驚きの表情で自身の体を確かめるおじさん。どうやら、傷は完全に治っているようだ。

——じゃない?!? えっ、今なんて言ったの? 勇者に斬られた傷?

まさか、もしかしてこのおじさん魔王的な存在……みたいな?

確かに青白い怖そうな顔で耳もなんか尖っているし、着ている服装もなんか魔王っぽい法衣って感じの服だ!!!

私が出たのやらかしに驚愕している間に傷が治った魔王のおじさんがこっちを見つめていた。

「ふっふっふ、一体どういう意図で我を助けたかは知らんが小娘! その力を私の野望の為に利用させてもらうとするぞ!!!」

恩を仇で返さんとはかりに、クワア! つと両手を広げて禍々しいオーラを纏って襲

い掛かってきた。

「ツツツツ!!? ……あれ?」

突然の事に声も出せず思わず目をつぶってしまったが、いつまで経っても何も起きないから恐る恐る目を開けてみると、魔王のおじさんは確かに私に襲い掛かってきた。

物凄くゆつくりした動きで……!

「えつと……、もしかしてこれも転生した時の特典かな?」

後にしつかりと分かるのだが、どうやら今の私はスポーツなんかでいう所のゾーンに入っており、脳がピンチだと思っただ瞬間に周りのスピードがゆつくりに見える現象が起きているのだ。

更に、その状態の私は肉体のリミッターが解除され100%の能力で動けるようでありあえずこのまま黙って突っ立っていても仕方ないので、正当防衛ということで小中の頃に親に習わされていた空手の技の1つである正拳突きを無防備である腹に一発本気で喰らわせてみた。

すると――

「グッポオオオオオオ!!!?」

魔王のおじさんの断末魔が辺り一面に響き渡り、私の拳が当たったお腹にはデカイ風

穴がポツカリと開いていたのだった。

「うわっ!! 汚い!!」

断末魔と同時に口から飛び出してきた青い返り血をヒョイと避けると、魔王のおじさんは膝から地面に倒れ落ちた。

「ぐ……があつ……、回復能力だけでは……なかったというのか……」

「うわあ……」

最初に出会った時と変わらない量の血反吐を地面に吐きながらブツブツと呟く様子はちよつとしたホラーである。

自分で自分のしたことにはちよつとドン引きしてしまいが、流石に魔王といえど初対面の人を殺すのはちよつとないで仕方なしにもう一度回復魔法で回復させる。

「まさか……!!? 一度牙を? いた我……いや、私を二度も救っていただけるとは……」

あれ? どうしようなんかメツチャ感謝してるんだけど。

もしかしてこれなんかのフラグが立つちやた? なんか跪いて忠誠心が芽生えてるような感じなんですけど!!?

「貴方様の偉大なるお力に感服いたしました。この魔王バドス!!これより貴方様の忠臣としてこの命を捧げとうございます。よろしければ貴方様のお名前をお伺いしても宜しいでしょうか?」

「えっと……、マジ？」

「マジ……とは……？」

「ああ、本気って意味ね」

「おお！ それでしたらこのバドスの言葉に？ 偽りはございませぬ！」

ヤバイ！ この人本気だよ。だって最終的に土下座のポーズもしてきたし、声に本気の圧が掛かりまくってるもん。

どうしよう？ 乗った方がいいのかな？

でも、私の名前ってバカ親が何を思っつけたか分からないキラキラネームだし、……ってここ異世界だしあまり違和感がないかもしれない。

ええーい！ 女は度胸と肝っ玉だ。

「そ、そうか！ なら、私の名を聞かせましょう。私の名は希星キララと言うわ！ よく覚えときなさい！！」

「はっはあく。鬼羅羅様キララ、今日この時より、この魔王バドスは全身全霊を持って鬼羅羅様キララに任せさせていただきます！」

なんか私の名前のルビが間違っつて捉えている気がしなくもないが、これ以上この魔王のおじさんに付き合っていると頭痛が痛いな状態になりそうだから、さっさとこの場から消えたいしどうでもいつか。

「それじゃ、私はとある目的があるのでここでおさらばしますね♪」

「お、お待ちください。私は……私はどうすれば？」

いや、知らんがな!？ 適当にお家に帰ればいいんじゃない？

って、それは流石にマズいか……。コイツの家つて言えば魔王城だろうし、そこに死んだはずの魔王が帰ってきたらどうなるかは火を見るよりも明らかだ。

「そうだな。お前には私の野望を叶える駒になつてもらおうか。だが、貴様の今の実力ではまるで足らん。しばらくは秘境かダンジョンの最奥なんかで自らの実力を伸ばすのだ！」

「私が自らを鍛える……？？？ そういえば、我は生まれてこのかた今まで一度たりとて訓練などというものをしたことがなかった。……やるぞ！ やつてやりますぞ！」

あつれく？ なんか復活なされたフリーザ様みたいなことになってるんですけど。もしかしてこれゴールデンに変身して超絶パワーアップのフラグが立ったのでは？

もう私どうなつても知らん。未来のことは未来の私がどうにかしているでしょう（自暴自棄）

「では、私は行くとしよう。私の野望を叶えるその日までに精々腕を磨くのだな」

とりあえずカッコつけた言い回しでその場は煙に巻き、転生特典の身体能力任せで全力疾走で逃げてやった。

なんかちよつとしたスポーツカー以上の速度が出たけど気にしない。

っていうか、今更ながらにあの遠くに見えていた城って魔王城だったんじゃ……。

普通こういう転移させる場所って序盤の街の城とかで、間違ってもラストダンジョンの城じゃないでしょ神様!!?!

そもそも、私が期待していたイベントってのはイケメン王子様とかカッコイイ騎士様との遭遇イベントであって恐ろしい魔王との遭遇などでは決してない!

「というか私強くなりすぎでしょ!? 何なのさっきのパンチは!!! 一撃で魔王の腹に風穴ができたんですけど!!!!」

誰もいない森の中で自分のトンデモパワーに叫び声を上げる。

だがまだ希星^{キララ}は知らなかった、この出来事が後の未来を大きく変えることになることになる……。

◆
数年後のある島……

「この禍々しいオーラは……まさか!？」

「ふっふっふ、流石は勇者デイルだな。この私の接近に気がつくとは」

背後から気配を殺して接近していた魔王の存在に気づいた勇者は剣を抜き、背後から迫ってきた存在に対して警戒を飛ばす。

「ど、どうしたんだよ師匠!？」

「待てホルン！ 確かに感じる。言われなければ気がつかなかったけど、この肌を刺すような強烈なプレッシャーは!？」

「ほう……。まさか、そのガキも私の気配を察知するとは、中々いい素材を育てているようだな」

「やはり……。いい加減に姿を現せ魔王バドス!!!」

何も無い空間に闇が広がると、そこから闇よりもなお暗い漆黒のオーラに包まれた巨漢の漢が島の大地に足を踏み入れる。

ズシンツツツツ!!!

大地が沈み込むのではないかと思わんばかりの衝撃がその場の全員に走った。

たった一歩足を踏みしめただけでここまでの衝撃を生み出す魔王バドスに過去の奴とは別人レベルに違うと剣を持つ力を強める。

「——つ随分と見違えたじゃないか。目的は私への復讐か?」

「ふつ、確かにかつての魔王だった頃の我ならばそうしていただろうな」

「では、今は違うとでも?」

「ああそうだ。今の我は魔王ではない! 新生魔王軍の総司令官バドス様だ!!!」

「新生魔王軍!?!」

「総司令官!?!」

勇者デイルの弟子であるホルンとリュウセイの2人が驚きの声を上げる。

「つまり、新生だとしてつけてはいるが、結局は貴様がトップとなつて肩書きだけ変えた魔王軍というわけか!」

「ふつふつふ、それは違うなデイルよ。確かに我は総司令官という肩書きを持つてはいるがトップではない。我はあくまであの御方の雑務を処理する雑用係にすぎんわ」

「はあ!?! 魔王が只の雑用係だつて!! 冗談だろ!!」

ホルンが魔王の言葉にアゴが外れんばかりの驚愕に陥るなか、勇者デイルは冷静に魔王が言うあの御方という存在に考えを張り巡らせる。

かつて自分はあるの魔王と死闘を繰り広げた間柄だ。それもたった1度だけとはいえ、両者の争いはかなりの年月を経てのことだった。

うぬぼれではないが、魔王の性格はよく知っているつもりだ。奴はプライドは高く? 偽りとはいえ自分の上に誰かを持つてくる筈がない。

ならば、奴の言う御方とはそんな奴にプライドを捨てさせることが出来るほどに強力な力の持ち主ということなのだろうか!?

頭の中に浮かんだ最悪の想像に、額から一筋の冷や汗が流れ落ちる。

「貴様が今こうして生きているのもその御方とやらの力のお陰か?」

「察しが良いな。そうだ! 我は死の瞬間、異世界の偉大なる魔神様の超魔力によつて

一命を救われたのだ……!」

「——!!?!」

その驚愕の事実には勇者デイルたち3人は声も出さずに固まってしまふ。

再び相まみえたかつての強敵である魔王。それも過去の頃よりも遥かにパワーアップして舞い戻ってきたというのに、そんな絶望を塗り替えてしまうかのごとく、その魔王以上の存在が控えているという事実には、さしもの勇者デイルもその胸中は穏やかではいらなかった。

そしてそれは、あの人物も——

そこは新生魔王城のとあるカーテンで区切られた一室。

そこに住まうことが許されているのはこの世でただ一人のみ、魔王を超えたる魔の神たる存在である希星^{キララ}のみ、

「なんか転生して道端に倒れていたおじさんの怪我を治療したらバーン様みたいなポジシオンに着いちやっただけだ——」

「どうしてこうなった!?!?!?!」

誰もいない一室で今の自身の地位に心ぶっ壊れたように叫び声を上げる希星^{キララ}の胸中
は今日も穏やかではなかった。

勇者VS魔王（負けイベント）

かつては魔王城で相まみえた勇者と魔王が再び名も無き島で雌雄を決する時が来た。

「さあ、お喋りもここまでだ……。勇者と魔王が対峙した時、そこには争いが生まれるのが世の理というものだ!!」

戦闘前の会話は終わり、魔王は纏っていた漆黒のオーラを強めて戦闘態勢に入る。

ピリピリとひりついた場の空気が更に強くなり、肌を突き刺すような物理的な痛みすら感じられるほどのプレッシャーに変わっていった。

「どうやら、再びこの剣を振るう時が訪れたようだ。さあ、お前たちは早くこの場から去るんだ……!」

「そ、そんな……!? 俺も一緒に戦うよ師匠!!」

「バ……バカッターレ! お前なんか敵う訳ねえだろ!」

対面する魔王に警戒して、こちらに対して目を向けずにこの場から去れと告げる勇者に食って掛かるリュウセイと、そのリュウセイをこの場から連れ出そうとホルンが説得する。

「そんなことない! 俺だって魔王と戦える戦力になるはずだ!」

「バカを言うな!! ガキの喧嘩じゃないんだ、数でどうこの次元はとつくに超えている!! お前たちは足手まといの邪魔者でしかない!!」

「——っ!?!」

「ほら、お師匠さんもああ言ってたんだ! ここは信じて邪魔にならないように逃げるのが正解なんだよ!」

いつもの優しい言葉遣いをかなぐり捨てた乱暴な言い方に、驚愕と足手まといという現実に二の句が継げずに呆然としてしまう。

その隙をについて兄弟子にあたるホルンがリュウセイの腕を強引に引つ張つてその場から逃げていった。

（ありがとうホルン。せめて今から始まる戦いに巻き込まれない場所まで逃げてくれ）

「ふっ、弟子との最後の別れは終わったか?」

「……意外だな。魔王であった頃のお前であれば俺の弱点であるあの2人を巻き込む形で襲い掛かつてくるものだと思ってたがな?」

「ふっふっふ、確かに魔王であった頃の俺ならばそうしていただろうさ。だがな、勘違いするんじゃないぞ!! この我があのがキ2匹をわざと見逃したのは可哀想などという甘い感情によるものではない。試してみたかったのさ、貴様に敗れて死やぶにかけてあの日からずっと鍛え続けた今の我的本気の力というやつを……!」

握りしめる拳からタラリと青い血が滴り落ち、その眼光から魔王の言葉が本心であると納得させられる。

今のこいつは魔王でもなければ復讐者でもない。純粹なまでの力の求道者だ。ならば、こちらも尚更に本気で挑まねばなるまい。

「そうか、だが覚悟しろ魔王バドスよ。この数年で強くなったのは貴様だけではないということを教えてやる!!」

「面白い！ ならばその言葉が真実かどうか確かめてくれるわ!!」

先制攻撃を仕掛けたのはバドスの方だった。

「まずは小手調べだ！ 受けてみよ!!」

右手から凝縮されたオーラを弾丸のように放ち勇者にぶつける。

「ぬうっ!」

目の前に迫る漆黒のオーラを凝縮された弾を高めた光の魔力を剣に集中させて受け止める。

「なにっ!?!」

されど、受け止めたオーラ弾は勢いを落とすことなく、勇者はじりじりと足で地面を削りながら後ろへ押されていた。

やがて勇者の後ろに生えていた大樹に背中がぶつかり、魔王の放ったオーラ弾に押し

つぶされる状況となった。

「ぬ……ぐう……、たあっ!!」

渾身の力を籠めてオーラ弾の軌道を上空へと逸らす。

そのオーラ弾が遙か上空に達すると、内包されたエネルギーが弾の形を維持できず、激しい爆発を起こした。

「ふっふっふ、この程度の兇戯で死んでもらっては興醒めだったが、その心配は杞憂だったな」

「はあ、はあ、はあ、……なるほど、かつて戦ったあの頃とは確かに違うようだな」

「それはこちらのセリフだと言っておこうか。昔の貴様では今の一撃を弾き返すことはおろか受け止めることすらできずにいただろうからな」

「ふっ、度し難い^{がた}ことに、世の中にいる悪党は貴様だけではなかったから……」

「勇者が皮肉をきかすも、今の一撃で現状の戦力差が魔王＜勇者という凶式が成りたつてしまった。」

「勿論、戦闘中にこの凶式がひっくり返るなんてことはザラにあることだが、現状で勇者が不利というのは変わりない。」

「貴様のその強さ、こちらも出し惜しみは無しで全力を尽くしてお前を倒す!!!」

それでも諦めたり絶望せずに立ち向かう者のことを人々は勇者と称するように、勇者

ディールの闘志に陰りは無く、剣に光の魔力をさらに注ぎ込み本来の姿である聖剣の輝きを取り戻させる。

「ほう、あの頃よりも洗練された眩い輝きだな」

「あの頃より成長したのは聖剣の輝きだけではないぞー」

聖なる蒼い光を纏った聖剣を振ると、その輝きが飛ぶ斬撃となつてバドスを襲う。

だが、その程度のことは過去に経験して分かっていたこと、バドスはこれに応戦して自身の纏っているオーラを巨大な手へと変化させて迎撃する。

当然ディールもこの程度のことを通じると思つておらず、バドスがオーラで斬撃を叩き潰したのと同時に爆発魔法を放つ。

「相も変わらずといったところか、コソコソと策を弄して立ち回るその戦い方はな……」
爆発魔法による一撃をまともに喰らつたというのに、バドスはまるで無傷の姿で爆風の中から現れた。

だがそんなことは分かりきっていたこと、今の奴と自分との力の差は半端な不意打ち程度では覆らない程に離れてしまっている。

だからディールは足を止めずにバドスの致命的な隙を作る為に連撃を仕掛ける。

一撃目——背後に回り込んで聖剣による斬撃を仕掛けるがオーラによつて潰される。

二撃目——高めた魔力によって聖水魔法を直撃させて氷漬けに成功。しかし、数秒後に内部から氷を破壊されてしまい、飛び散った破片がディールを襲う。

三撃目——高笑いするバドスに再び斬撃を仕掛けるも剣を振るう前にオーラで吹き飛ばされる。だが、それは囿で本命は注意の逸れたバドスの足元に投げ込んだ特製の爆発アイテムで、不意打ちによる足元からの突然の爆発攻撃にバドスが宙に吹き飛ばす。

四撃目——先に体勢を立て直したディールが空中で身動きの取れないバドスに全力の一撃をお見舞いする。

「油断したなバドス！ 地水火風の精霊たちよ、今こそ邪悪を葬り去る力を与えよ!!!」

かつて魔王を倒す旅路の途中で契約した神霊級の4大精霊の力を借り受ける際の祝詩のりを唱える。

聖剣に新たに赤、青、緑、茶、のそれぞれ4つの属性を表す色の光球が付与される。

「ぐぬぬうう！ 再び我にそれを撃つか、勇者最大最強の必殺技をつ——!!!」

「貴様に再びこの技でトドメを刺す！ 精霊ホーリーソード・オブ・ディール使いの聖剣!!!」

聖剣に付与された4つの色の光球が聖剣の蒼の光に混ざり合って黄金の輝きへと昇華される。

そのまま、黄金に光り輝く聖剣を宙を舞うバドスへと振り払い、斬撃というよりもビームと呼べるものを放出する。

「その技を真つ向から打ち破ってこそ我が汚点は雪そそがれるのだ！ 喰らうがいい魔王の過重深淵サタン・オーバード!!」

「なにっ!!? 俺の技とそっくりだと!!」

バドスはその技を避けようとせず、真つ向から打ち破らんとオーラを集中させてディールの技とそっくりな漆黒のビームを放出する。

2つの光と闇の光線がぶつかり合うことで、巨大なエネルギーの余波が周囲を破壊する。

「ぬうおおおおお!!!」

バドスは空中にいるため構えも万全ではなく、ディールの後に技を撃ちだしたために本来ならば実力が上のバドスの技が押し勝つことができず、両者の技は拮抗状態に入る。

「くっ、これでもまだ拮抗状態にするのがやつとか……」

「はっはっはっ!!! 随分と苦しそうな顔をしているではないかディールよ！ それが全力か？ ならこの勝負私の勝ちだな!!!」

バドスは空中で姿勢を正し、更にオーラの出力を上げて徐々にだがディールの技を押し返していく。

そしてついに、バドスの放つ漆黒のビームはディールの黄金のビームの大半を押し

けて目の前にまで迫ってきた。

「フハハハハハ！ 貴様との因縁もこれまでだ。かつての我が汚点と共に消え去るがい!!!」

トドメだと言わんばかりにオーラをさらに強めた一撃を加えてきた。

それが本当にトドメとなってディールの放ったビームは完全に掻き消えてしまい、聖剣でバドスのビームを受け止める。

「くうっ……うおおお!!!」

「ほう、まだ足掻くか。だが、その無駄な足掻きもいつまで続くか……。見世物として自分に見物しておいてやる！」

必死になって喰らいつくディールを笑い者にしながらじつくりといたぶるように攻撃を続ける。

「まっ……だだ……！ 俺は世界を救う勇者なんだ!! 例えこの命を燃やし尽くすことになるうとも、悪を滅する正義を貫く剣となるんだ!!!」

聖剣に纏っていた黄金の光がディールにも纏わりつき、それは炎のように燃え上がる。

それはディールの持つ光の魔力と命を削って捻出する生命エネルギーが混ざり合った奇跡の1つであった。

「まさか、この土壇場で奇跡を起こすのか?!」

「はああああ!!!」 再び俺に力を貸し与えよ精霊たちよ! 精霊使いの聖剣!!!」

押し負けたあの技を再び放つと、今度は先程とは逆にバドスの漆黒ビームを押し返していった。

その力は凄まじくみるみるうちにバドスのビームは押し負けていき、ついにはバドスの目の前までディールのビームが迫っていった。

「ば……バカな!?」 死にぞこないの踏ん張り程度でこの私の必殺の技を押し返すだと!? ならん! ならんぞ!! 二度の敗北など我にあつていいはずがないわ!!!」

そこには笑い者にしていた余裕は一切なく、切羽詰まったような必死さがあつた。

だが、その必死さを出すのが如何せん遅すぎた。ディールの再び放つた精霊使いの聖剣がバドスの魔王の過重深淵を完全に凌駕して魔王バドスを?み込んでいった。

「ぐはあああああああ~~~~ッ!!!」

魔王バドスの断末魔の悲鳴と共に黄金の光のビームは天高くに消えていった。

それを見届けるとディールは今の必殺技に使ってしまった生命力の代償が一気に襲い掛かってきた。

「ぐう……」

手に持っていた聖剣を杖代わりにしながら片膝をつくディールの背後で自身を呼ぶ声か2つ聞こえてきた。

「師匠〜！」

「お師匠さん！ やっぱり、勝ったのはお師匠さんだったんですね〜!!」

片膝をつきながら顔だけ後ろを振り返ると、涙を流しながら喜色満面の笑みで駆け寄ってきた。

それは本来ならば微笑ましいのだが、ディールは苦虫を噛み潰したような顔で2人を見つめる。

「お前たち……、無事だったのは嬉しいが早くこの場から去るんだ!」

「えっ? なんぞだよ師匠。さっきのあの魔王とかいうのは師匠が倒したんだろ?」

「そうだぜ! あのスゲエ光の魔力による技を喰らって無事で済むわけねえって!」

確かに、あの雲をも貫く光の奔流をその目で見てあれを耐えられる存在がいないと疑わないのは無理ないだろうが、その技を撃った本人である勇者ディールはバドスが吹き飛ばされた方角を睨むと、空の彼方からキラリと何かゴツチへ近づいて来るのが見えた。

「……やはり!」

「え? どうしたの師匠?」

「な……なんだよお師匠さん。その表情とかさっきの去れとか言う言葉だって、あれじゃまるで魔王の奴がまだ生きているみたいじゃねえか？」

ホルンの焦ったようなセリフがフラグとなったのか、ディールの目の前にズドン!! と何かが飛来してきた。

「……………流石はかつて一度我を打倒した奥義精霊ホリリッド・オブ・ディール使いの聖剣……!! いや、こういうべきか? 大したものだな、人類の希望である勇者ディールよ!!」

そこには全身が傷だらけで光の魔力によって酷い火傷を負いながらも、しっかりと自身の足で立つ魔王バドスの姿があった。

「う……………? だろ!!? あのお師匠さんの技を喰らって生きてやがった!!!」

「そんな…………!!? これが、魔王バドスの力!?!」

「……………」

魔王バドスの生存に驚愕するホルンとリュウセイはその事実に心の恐怖と絶望が湧き上がった。

そんな2人を安心させるかのように勇者ディールは立ち上がって2人を後ろに隠し、再び聖剣を構えて魔王バドスを睨む。

「フアツハツハツハ——ツ!! この我を二度も打ち負かした貴様の力は本物だと認めよう。だが、奇跡の代償は随分と重かったようだな? 今の貴様に我と戦う力が……い

や、我と戦う術があるのか？」

「ふっ……、流石だな。既に見抜かれていたか……」

デイルは剣を構えていたポーズを解いて地面に剣を刺す。

「ちよっ……!!? どうしちやつたんだよお師匠さん。魔王が目の前にいるのに武器を手放すなんて!!」

「……っは！ まさか師匠!?!」

ホルンはデイルの行動に意味が分からず困惑し、逆にリュウセイは地面に刺された聖剣を見て何かに気が付いたようだ。

「ふん、その勇者の弟子よ。今の絶望的な現状を分かっているようなら教えてやろう！」

そう言うバドスはデイルに向かって最初に攻撃したようにオーラを凝縮した弾を撃ち込む。

「はっ!!」

それをデイルは即座に地面に刺さった聖剣を引き抜いて弾き返す。

「な、なにが教えてやるだよ!! そんな不意打ちでお師匠さんを倒せるなんて思うなよ!!」

「……違うよホルン。見ろ！ 師匠の剣を!!」

リュウセイが指差した聖剣にはヒビが入っており、それは悲鳴のようにビキリと音をたてながら広がっていき、やがてはその刀身が粉々に砕かれていった。

「はあ!?! 今なのでお師匠さんの聖剣がぶっ壊れるとか? だろ!?!」

「違うよホルン。師匠の剣は俺たちが来た時から限界だったんだ」

「その通りだよ。俺の精霊ホーリソッド・オブ・デイル使いの聖剣が最初はまったく通用せずに奴の技を聖剣で受け止めてしまった。その直後にもう一度精霊ホーリソッド・オブ・デイル使いの聖剣……それも限界以上のパワーで使用した為に聖剣自体が耐えきれなかったんだ」

「そのお陰で我もこうしてまだ生きていられるのだがな!」

「そ……それじゃ、お前が生きているのはお師匠さんの聖剣が壊れかけていたから!」

「ご明察と言っておこうか。それでどうするんだ? 肝心の勇者はボロボロの状態に加えて武器である聖剣も壊れて使い物にならない。我も無視できぬダメージを負ったが貴様らゴミ共を片付けるのは訳ないぞ!!」

論より証拠とばかりに漆黒のオーラを全身から放ち攻撃してきた。

「ぐあああああ!!」

3人共が飛んできたオーラに何もできず吹き飛ばされてしまい、無様に地面を転がっていく。

「さて……、お遊びも過ぎてしまったな。そろそろ終わらせるとしよう」

無用な手心や遊び心が思わぬ窮地を招いてしまうということを先の出来事で再確認したバドスは確実に命を絶つ為に首を斬り飛ばそうと、右手にオーラによる疑似的な剣、通称オーラブレードを作り出す。

「貴様の首を魔神様への手土産にしてやるわ！」

勇者にのみターゲットを絞ったバドスは右手に構築したオーラブレードを構えて真っ直ぐに飛びかかる。

「……魔王バドスよ。貴様は俺に戦う術すべがあるのかと言ったな？ ならば、見せてやる

！ 勇者の武器が聖剣だけではないということをお！！」

立ち上がったディールは再びその命を燃え上がらせて黄金の炎を身に纏った。

『閃光破邪拳』

「ぐわっ!？」

その直後にディールの姿が掻き消えて、バドスの右肩をすれ違いざまに拳で撃ち抜いたのだ。

「す……スゲーや！ 聖剣を失ったっていうのに、あの魔王に一撃かましちまったぜ!!」
「それにあの動き、後ろから離れて見てたっていうのにまるで見えなかった!？」

今の一連の動きが見えなかったことや魔王バドスに一撃を喰らわせたことに今日何度目かの驚きを口にするホルンとリュウセイだったが、技を喰らったバドスは殴られた

右肩を押さえながらも不敵な笑みを浮かべていた。

「フ……フフツ、そういえば貴様のパーティーには武神と呼ばれていたあの不快な爺さんがいたな。今のも奴に教わった技か？」

「ああその通りだ。貴様を倒した後に役に立つなどと言われ、文字通り血の滲むような特訓の末に覚えた格闘技の1つだったけど、まさか本当に役立つ日が来るとはな。あの人
の先を見る先見の明にはいつも感謝させられっぱなしだ……」

「随分と冷静だな。今の攻撃も私の右手のオーラブレードを警戒したが故に、意識の薄い右肩を狙ったのだろうか？ 正解だ！ もし他の箇所を攻撃していたならばすれ違いざまに貴様の首か心臓を刺し貫いていただろうからな！」

実際にその通りだ。もし仮に頭でも狙っていたのなら、オーラブレードで防いでそのままディールの体を切り刻んでいただろう。

だが、右手にオーラブレードという強い力を持ってしまったせいで、右側への注意が疎かになってしまい、その為に意識していない右肩を撃ち抜かれてしまった。加えてすれ違いざまに一撃を加えようにも右手を動かす右肩がやられてしまったが為に動けな
いでいたのだ。

「冷静だと？ それはこっちのセリフだな。かつての貴様なら俺の精霊^{ホーリーソード・オブ・ディール}使いの聖剣で
逆転された時にはもう怒りに飲み込まれて理性を失っていたはずだがな？」

「そんな短絡的な弱点は既に克服しているわ。我は一度魔神様に復活させてもらった際に愚かにもその力を欲さんと牙を？いたのよ。まあ、結果は今こうして新生魔王軍の総司令官をやっている時点で理解出来るだろうがな。とにかく！その時の愚かさを教訓に、我は肉体強化だけではなく、精神力をも鍛えていたのだ」

「そういうことか、本当にこの数年で厄介な相手に成長したものだ」

（俺が接近戦も充分に戦えると知ってオーラブレードを解いた。威力がデカイぶん隙に繋がりがやすくカウンターで諸刃の剣になることをよく理解しているな）

冗談抜きで肉体的にも精神的にも数段もパワーアップして目の前に現れたバドスに悪態をつきたい気分だが、それと同時に感嘆の声を上げたい気分でもあった。

よくぞここまで自らを鍛え上げ成長したものだ。同じ戦いの世界に生きる者として誇りに思いたくなるほどの強さだ。

惜しくらむのは、それを正義ではなく悪に利用してしまっていることだ。もし少しでも良い方に考え方を変えることができたならば、きっと自分よりも勇者にふさわしい人物になったであろうと思わずにはいられなかった。

「とはいえ、そんなタラればを考えている暇はないか……」

「なにをブツブツと言っている？」

「お前の倒し方を考えていたのさ！」

「ほぎけえ！ 既にその状態を保つだけで精一杯な分際で、この我を倒せると思ってるのか!？」

ディールの挑発を受けて飛びかかるバドスだったが、それでも頭の方は冷静なのか打ってくるパンチやケリの動きは最小限に抑えつつ、的確に急所となる場所を狙っている。

「フハハハハハッ!! 必殺技の撃ち合いには負けてしまったが、どうやら格闘技に関しては付け焼き刃！ それもこの我よりも未熟のな!!」

「ぐっ!! がはっ!!」

即座に倒されることはないが、それでもバドスの攻撃はディールの防御をすり抜けて体に命中し、逆にディールの攻撃は避けられるか防がれてしまう。

このままいけばディールが負けるのは目に見えているが、それでも殴られ続けているディールの眼からは一切の闘志が揺らぐことは無く燃え続けていた。

(なんとという眼をしている！ 勇者を相手に余裕をみせては返り討ちにあう危険がある。次の一撃で完全に終わらせてやる!!)

「これで終わりだ勇者ディール!!」

「その一撃を待っていた!!」

ドゴオオン!!

「な……なに……!!」

ディールはバドスの攻撃を防御を捨てて無防備にその身で受けてみせた。

その代償は大きく、バドスの腕はディールの腹部を貫通しており、誰の目から見てもそれが致命傷だと分かるものだった。

「き……貴様?! なぜ無防備に受けた。 貴様ならば避けることは無理でも耐えることはできたはずだ!!」

「ゴフツ……!! 確かに、俺なら今の攻撃を耐えることは出来るだろう。だがそれは俺の両腕を犠牲にしてだ。 そうなれば後は詰め将棋のようにお前になぶり殺しに合うだけだ。 ならばいつそのこと、未来に希望を託そうと思つたまでのこと……」

「未来にだと……!!? ぬう!!」

ディールの腹を貫いたバドスの腕が引き抜けなくなっている。

どうやら、ディールが最後の力を振り絞って抜けないようにしているようだ。

「うぐぐうう……!! 最後まで悪足掻きをしようって!!」

「俺は確かにお前よりも格闘技に関しては未熟者だ。 だがな、戦闘のいろはならお前の方が遥かに未熟者だ!!」

自身に残つた魔力と生命力を全て右手の拳に集中させて最後の「一撃を決める!」

「お前はもう逃げられない! これが俺の勇者としての最後の「一撃だ!!」

『聖刻印章』

「なっ……があああああ!!！」

バドスの胸に叩き付けられた拳から、地水火風に加えて光の魔力によつて出来た5種の属性によるルーン文字による紋章が刻み込まれた。

これは一種の封印術にも似たような効果で、5種類の属性がお互いの力を増幅しあつて、まともな方法では解除することは不可能となつており、その強すぎるエネルギーが胸に刻み込まれたせいで体内のエネルギーがまともにも練ることが出来ずに魔法はおろか普通の者ならば歩くことさえ困難になるレベルになつてしまう。

「ただしこれには欠点があつてね。強すぎるが故にかなりのエネルギーを溜めなければ発動できないし、直接相手に叩き込む必要があるんだ」

「こ……こんなふざけた紋章を俺の胸に刻み込むとは……!!！」

「ははは……、紋章のデザインの文句は俺に言うなよ。この技を開発したのは武神ラガン様と4大精霊たちなんだからさ……。がはっ!!！」

デイルは腹に風穴を開けられた上に全エネルギーを使用して聖刻印章を発動させたのだ。もう既にその命は風前の灯火となつており、その金髪の髪も真っ白に色を失つていき、肌も蠟人形のような色へと変わつていく。

その姿を見てバドスの頭の中に湧いた怒りの感情が消えてゆき、落ち着いた雰囲気

取り戻してゆく。

「……勇者、デイルよ。貴様の命もこれまでだが、もし貴様が我らが新生魔王軍に加入するといふのであれば、魔神様をお願いしてその傷を治してやる。どうだ？ 悪い話ではなからう」

「……………断るよ」

小さく首を振って優しい声で断りの返事を返すデイルに、バドスも納得したように目を閉じる。

「そうか、貴様ならそう言うだろうな。ならばこれ以上の会話も無駄だな。せめてもの慈悲だ。そのままここで朽ちるがいい……」

もはやバドスの腕を拘束し続ける力も無くなり、するりと呆気なくデイルの腹部から腕を抜くことが出来た。

だが、デイルが力尽き欠けようと胸に刻まれた紋章は消えることなく効果を発揮し続けていた。

「ぐぬぬううつ、はあ、はあ、厄介な紋章だが、新生魔王城へ帰ることくらいは問題なさそうだな」

バドスがデイルの死を見届けることなく背を向けて城へ帰ろうと足を踏み出した

その時——

「待て!!」

「ん?」

「デイルの弟子であるリュウセイが短剣を構えてバドスの前へと立ち塞がった。

「あああ……、何やってんだよりユウセイ! し、死んじゃうぞ!」

「その小僧の言う通りだ。大人しくそこら辺の草むらで怯えて震えながら身を隠していれば、貴様らガキ共の命くらい見逃してやったものを……」

「ふざけるな! 師匠を殺されて黙って見逃す筈がないだろ!!」

「っ! 見逃すだと……? この魔王バドスに向かって貴様のようなガキ風情に見逃される筋合いはないわ!!」

「ぐあっ!」

「リュウセイっ!!」

リュウセイの見逃すという発言に腹を立てたバドスは、弱体化していながらもそれを感じさせない動きでリュウセイの鳩尾に蹴りを叩き込み吹き飛ばした。

「ぐふっ! かっはっ……!!」

「おい! 大丈夫かよ。無茶だぜリュウセイ! あのお師匠さんでも歯が立たなかった相手に俺らがいくら束になって襲い掛かっても無駄だっ!!」

吹き飛ばされたリュウセイを抱き起すと、身悶えしながら呼吸が安定してきたリュウ

セイに戦いは無謀だと言うと、リュウセイがホルンの胸ぐらを掴みあげる。

「そんなことない！　ホルンは聞こえなかったのかよ!?　師匠がああ魔王に向かって言った言葉を……!!」

「……………もしかして未来に希望を託そうって言葉か？」

「ああそうだ。その未来つてのは誰に向けて言った言葉だと思う？　魔王かそれとも見知らぬ誰かか？　違うだろ！　俺たち勇者の弟子に言った筈だ!!」

「リュウセイ……………」

「もしホルンがここから逃げ出したって言うのなら俺は止めたりはしない。でも、俺は師匠の意思を……………未来を託された者として戦うよ!!」

「……………ただくもおく！　弟子にそこまで言われてはいそうですか！　って逃げ出せる訳ねえだろ!!　俺様だってお師匠さんから修業を受けた弟子の1人だ。魔王ぐらいやってやんぜ!!」

「ほおくおく、随分と生意気な口を利くではないかガキ共が!!　いくらこの我が弱体化していても、貴様らのようなちんけなカス2つを消すのに10秒とかからんぞ!!」

ほぼ初となる実戦が魔王との戦いなど歴史上でも未だかつてない不幸な初戦闘を送ったのはこの2人が初めてだろう。

そんな絶望的な状況だが、勇者デールの教えと託された未来を胸に秘めた2人の眼

には戦う闘志が湧いており、その姿は勇者、ディールに重なるものがあつた。

「ほう、最初はただのゴミ掃除かと思つたが、……気が変わったぞディールの弟子たちよ！ 貴様らは一人残らずこの世から消し炭にしておいてやろう」

「やれるものなら——」

「——やってみやがれ!!」

リュウセイが短剣を持つて突撃し、ホルンが後ろから魔法で援護射撃を行う。

「……その意気やよし。だが、この我を相手に遅すぎる——」

果敢に攻めるリュウセイの剣戟も、後ろから放たれる火や氷や風といった多彩な魔法も全て片手で凌ぎ切り、空いた片手でリュウセイの腕を掴むと地面に向かって叩きつけた。

「ああつ！ ぐわつ！ うえつ！ がはつ！」

「リュウセイくっ！」

何度も何度も雑巾を振り回して遊ぶ子供のようにリュウセイを叩きつけ、そのリュウセイが魔王バドスに掴まれているため魔法も使えずただ叫ぶことしかできないホルン。

やはり、いくら弱体化しようとも魔王に子供2人が敵うはずもなく、未来への希望は呆気なく崩れ落ちそうになつた。

「ふん、やはり貴様らではどれだけ意気込んでみたところで、到底奴の跡を継ぐには実力

「が足りんわ……」

ボロボロになったリュウセイを投げ捨てる、確実に殺す為に両手に魔力を溜める。「くっ、この紋章のせいであつたがこの程度の魔法を撃つにも時間がかかる」

魔王バドスがトドメの魔法を放つ前に、ホルンが投げ捨てられたリュウセイを揺さぶり起こす。

「おい！ おいしつかりしろリュウセイ!! お師匠さんから未来を託されたんだろ？ なら、こんな所で突つ伏して倒れてんじゃねえよ!!!」

「……っぐ！ 分かつてる。俺はまだ……師匠の教えを何もいかせちやいない!!」
フラフラになりながらも立ち上がったリュウセイに、涙を拭いてホルンも魔王に向き直る。

「正直言つちまえば後悔半分に期待半分な気持ちなんだぜ！ さっきは手も足も出せず、にボコスカにやられたけどよ。あれはお前の全力じゃねえって俺様は知っているからな」

「もしかして俺が師匠の勇者選別試験に見せたつていうあの隠された力つてこと……？」

「そうだ！ あれをお前がここで使えば必ず勝てる！ 俺様はそう信じてるぜ!!」
「でも……」

ホルンからの信頼に肩が重くなるリュウセイはつい弱気なことを口走りそうになる。それをホルンが今まで見せたことのない凄いい顔で怒鳴り散らして止める。

「ふっぎけんじゃねえぞ！ でももへちまもあるか!! お前がお師匠さんから未来を託されたから戦うって決めたんだろ!! 男なら自分で言ったことの責任つてものを取りやがれ! お師匠さんはそれを見事にやってみせてきたんだぞ!!!」

「——っ!? そうだね。俺が間違つてたよ。例え俺にその力があるうがなかるうが、師匠の意思を継いだ者として全力で戦わなくちゃいけないんだ!!」

ホルンからの厳しい言葉にリュウセイの心と体に魔王を倒せそんな勇氣とパワーが湧き上がってきた。

「くつくつく、友情という三文芝居はお終いか? なら、こちらの準備も終わったことだ。2人纏めて仲良く地獄に落ちるがいいわ!!!」

『サタンフレイム』

激しい炎の渦が一直線にリュウセイたちに向かつて迫ってきており、とてもではないがこれをどうこうする術すべを2人が持っているようには思えない。

このままでは2人共が炎の奔流に飲み込まれてしまい、骨すら残らずに燃え尽きてしまふのが容易に想像することが出来る。

だが、諦めない者に希望が舞い落ちるように、リュウセイの必ず勝つという意思が眠

れる力を奇跡的に呼び起こす。

「デイルが巻き起こした奇跡が黄金の炎ならば、リュウセイが巻き起こした奇跡は紅い紅蓮の炎のオーラだった。」

「これが俺の全力だああああ!!!」

『ドラゴンブレイク』

龍を模った紅蓮の炎のオーラが魔王バドスの放ったサタンフレイムにぶつかりあい、鏢迫り合いになる。

「ぬう!? 我がサタンフレイムを止めた? ……いや! あのオーラの色はまさか!?!」

自身の放つ魔法の向こう側から見えるリュウセイの纏うオーラの色に驚愕して目を見開く。

「よっしやー! やっぱりお前はスゲエゼリユウセイ!! そのまま魔王の魔法なんぞ跳ね返しつちまえ!!」

「——っ! ごめんホルン。このままじゃちよつと勝てそうにない」

最初は互角に打ち合っていたように思えたが、それでもまだ力は足りておらず、目に見えて魔王の魔法がリュウセイの技を押し切っていく。

「はあ!?! ちよつと待てよ。お前が負けたら……クソお!! 俺も力を貸してやるから負けんじやねえぞ!!」

『ゴクマフレア』

ありつたけの魔力を炎に変化させたホルンの魔法で再び拮抗状態へ戻る。

このままではジリ貧になってしまい、戦いに時間を掛けて不利になるのはバドスの方だ。

故に、バドスは予測も出来ない攻撃に出る。

「やはりガキとはいえ勇者ディールの弟子か……。これを使えば新生魔王城へ帰るのも危うくなるが、将来の天敵になり得る貴様らをここで殺すことが出来るのならお釣りがくるわ!!」

ビッ!

「なっ!? があつ……!」

魔王バドスの奥の手という程のものではないが、自身のエネルギーを眼に集中させて放つ怪光線を使用し、リュウセイの胸を貫いたのだ。

「——っ! リュウセイ!!」

「これで本当にお終いだ! 骨ごと残さず消え去るがいい!!」

「クソつたれえ!!」

最後にホルンが何か言っていたようだが、残念ながら魔王の魔法による破壊音で誰の耳に入ることなく2人は獄炎の渦の中に消えていった。

「ふっふっふ、ようやく終わったか。……ごほっ!?」

勇者デイルルによつて刻み込まれた紋章によつて体を滅茶苦茶にされたというのに、その状態で最上級魔法に加えて無理矢理に怪光線を出したものだから、体内のエネルギの枯渇に凄まじい疲労が襲い掛かってきた。

「さっきあのガキが見せたあのオーラはまさか……、いや、私の炎によつてそう見えただけの見間違えか。そうでなければ今ここで死んでいたのは私の筈だから……」

重症を負つてズタボロになった体を引きずりながら、魔王バドスは新生魔王城へ帰つていった。

——リユウセイたち、勇者デイルルの弟子の生存を確認せぬままに……。

新生魔王軍幹部登場

勇者とその弟子たちとの戦いを終え、傷だらけになりながらも魔王城への帰還を目指している、待機させておいた部下の鳥獣型のキメラモンスターが運良く心配して迎えに来ており、なんとか無事に魔王城へ帰還する事が出来た。

今の新生魔王城は、かつてバドスが根城にしていた場所ではなく、キララが1から場所を選んで作り直した新たな城で、その外観は邪悪さとは無縁なキララが前世でお気に入りだった小説の主人公が住まう白亜の城をイメージして建てられたものだ。

「はあ、はあ、なんとか魔王城へは帰れたか……」

傷を負った体を引きずりながら、勇者討伐の報告と傷の回復をしてもらおうとキララがいるであろう玉座の間に向かおうとするハドスに声をかけられる。

「おやおや、新生魔王軍総司令官ともあろう者が何とも無様な姿だな」

馬鹿にしたような声が聞こえると同時に、城を支える柱の影が膨らみ、吹き上がる。

そんな影が空気に溶けるように薄れていき、やがてその中から薄黒い肌と特徴的な長く尖った耳をした外見は20歳ぐらいの闇妖精ダークエルフが姿を現した。

「なんだ貴様かアウラよ」

「なんだとは随分な言い草だな。それにしてもその様子、どうやら勇者の実力は想定以上だったようだな」

馬鹿にはしていてもバドスの実力を認めていたアウラはその傷だらけになった体を見て、勇者がどれほどの強敵であったのかを知る。

「ん？ おお!! バドス様そのお怪我は一体?」

「面倒なのに見つかったな」

耳が痛くなるような大声でやってきたのは下半身はワニ、胴体はクマ、腕はゴリラ、尻尾はトカゲのような作りで、頭部はライオンのキメラ型モンスターだった。

その姿を見て耳に手を当ててアウラがさっさとその場から去っていった。アウラのようなエルフ種は物静かな森で暮らす為、大きな音を苦手としており、大声が標準装備なこいつが嫌いなのだ。

「……つち、消えよったか。まあいい、お前もそう声を出すなアルダートよ。我の体の傷に触れるな!」

「おお、これは申し訳ございません!」

アルダートは元バドスの配下である魔王軍四天王のウチの一体だった。

当時は勇者デイルに敗れたものの、キメラタイプのモンスターは生命力が強く半死半生のまま巣穴で眠りについていたら、既に勇者側の勝利で戦争が終わっており、目的

もなくふらついていたところをキララを襲って返り討ちにあい保護されたのだ。

「その傷はもしや勇者の奴に……？」

「それ以上は口にするな。なに、奴は確実に我が始末した。問題はない」

「うおおおおおおお!!! 流石はバドス様ですな。あの勇者をたつた1人で始末なされるとは!!!」

苛立たしい表情でアルダートの言葉を遮ったバドスは不敵に笑みを浮かべて勇者討伐を教えてやると、アルダートは雄たけびのような声で歓喜する。

「ソフフフフ……、この新生魔王城でその様な下品で耳障りな声を出すとは、少くしばかし常識がないんじゃないやありません？」

「なんだと!？」

奥の通路から呆れたような声が聞こえる。その相手を見下さんといった感情を含んだ声音に、ムカツ！ としたアルダートは敵意を？き出しにして奥からやって来る者を睨みつける。

通路の奥から姿を見せたのは、ピエロのメイクと中国の暗殺者のようにダボつとした暗器を隠しもつたような服装の妖しさ全開の男だった。

名をヒルキアといい、アウラやアルダートが新生魔王城の幹部だとするならば、ヒルキアは情報や暗殺などの裏の幹部といった立ち位置に属する者だ。

「それはそうと、バドス君は早くキララ様にお会いになった方がいいんじゃないかい？

その傷もそうだけど、お胸の方にもくっつと厄介な爆弾を抱えてるようだしね♡」
指で円を作り、望遠鏡のようにしてバドスの胸をじっくりと見つめる。

服で覆い隠して見えないようにした上で、少ないながらも魔力で細工したはずの聖刻印章を即座に見破るとは、流石は情報に関する分野については新生魔王軍で随一の実力者と認めざるを得ないだろう。

「ふん、貴様に言われんでも分かっておるわ。それよりも、我が貴様に任せました仕事は——」

「勿論、完璧に終わらせておいたよ。その詳細は既に報告済み。今はキララ様からのご命令を遂行中さよ。」

「なに、キララ様のだと……?」

「そうだとも。ボクもキララ様にお問い合わせをされてね。新生魔王軍幹部を全員招集せよとの命令を下されたのさ。」

「つということは、俺も呼び出しされたということか!？」

突然の招集命令にアルダートが驚くがバドスはこの招集命令の狙いがなんなのか薄々とだが勘づいている。

既に新生魔王軍は世界を支配出来るほどの莫大な戦力を有している。

つまり、この招集命令は世界征服の合図でもあるということだ。

「くつくつく、なるほどな。アルダートよ、貴様は少し後から来い。どうせ他の者がやって来るまで時間にかかるだろう。それまで貴様にはヒルキアの手伝いでもしておけ」

「ワア〜才☆ボクにも助手が出来るなんて。それじゃ一緒に皆を呼びに行こうかアルダート君♡」

「ぐつ……、バドス様からの命令ならば仕方ないな。それではバドス様！ また後でお会いしましょう」

嫌そうな顔をしながらアルダートは渋々とヒルキアの後について行った。

それを見送ったバドスはキララが待っているであろう玉座の間へと足を運ぶ。

謁見の間への道すがらにバドスは過去の事を思い出す。

キララ様と初めてお会いしてから早数年の月日が経った。

初対面の私の印象は最悪の一言に尽きるだろう。命の恩人であるキララ様に、あろうことか敵意をもって襲い掛かってしまった。

「フツ……、今となつては己の愚かさに溜息すら出るな。——うぐつ！ 傷が酷く痛

む。早くキララ様の元に行かねば我も勇者の後を追ってしまいかねんな」

ジョーク混じりに笑うと痛む体を引きずってキララの元へ急ぐ。

「失礼いたしますキララ様！ 至急お目通りをお願い致しますのですがー！」

玉座の間の大きな扉の前で中に声が聞こえるように大声で謁見の申し出を行う。

それに対して、中からの返答は無言ではあるが、玉座の間の扉が独りでに開きだした。

これはつまり、バドスにキララへの謁見の許可が下りたということだろう。

視界に飛び込んできたのは広く豪華な造りの部屋で、幻想的という言葉以外は見当たらない神秘さすら感じるような調度品や宝石で作られたシャンデリアが吊るされており、ここが魔王城であるなどと思えないほどの美しさだった。

だが、本当に目を引くのは、この部屋の中心に設置されている黄金と水晶でできた玉座に座す、冬の夜空を思わす腰まで伸びた黒髪ロングに雪のような色白さに、その瞳は万人を魅了せんがほどの妖しい色香を含んだ、まさに女帝と評するような印象のとびきり美人であろう。

「……来たか。無事ではないとはいえ、こうして私に会いに来れたということは勇者の討伐は成功したということでもいいのだな？」

「はっ！ キララ様。かなりの深手を受けましたが勇者めを打ち倒すことが出来ました」

なんと、驚くことに玉座に座る女性はキララだった。僅か数年の月日でかつては学生の少女が大人の女へと成長したのだ。

そうなった理由は神の転生特典による内包されたエネルギーが体に影響を及ぼしたのが1つと、新生魔王軍を結成するまでの激動の日々が関係するのだが、その話はこのでは割愛させてもらおう。

そんなことより――

(え、勇者を倒せるレベルまで成長してるとは思ったけど、なんやかんや主人公補正とかで生き延びたりして失敗報告になると思ったの!!!)

顔には出てはいないが、心の中では顔面蒼白レベルで驚愕しており、バドスの体の傷を見てそれはもう激しい激闘があったんだろうな〜と現実逃避気味に勇者とバドスの戦いを想像する。

バドスは深々と頭を下げて勇者討伐の報告を済ますと、キララは表情1つ変えずに昔を懐かしむようにバドスに語り始める。

「そうか……。そういえばあの日、貴様は勇者に敗北して死に掛けていたところを私が助けたのが切っ掛けだったな」

「そうですね。その頃の私は愚かにもキララ様に歯向かい返り討ちにあつてしまい腹に風穴を開けられてしまいましたな」

クツクツクと笑いながら自らの過ちを懐かしむが、普通は腹に風穴を開けられればトラウマになるだろう。

しかしながら、魔王であったバドスにとってその程度のことには笑って水に流すくらいの器を持ち合わせている。

「うっぐっ……!?! はあ、はあ、はあ、昔を懐かしむのもそろそろ限界のようですね」
懐かしい思い出話を語っている途中、思い出したかのように口から血を吐くバドスは、胸を押さえながらその身を一步前に差し出し、キララに自身の身を任せる。

そこに戸惑や躊躇などは一切なく、その様子からこの傷を治してくれるという全幅の信頼をキララに置いていることが分かる。

そしてその信頼通りにキララは手をかざすだけで、傷だらけのバドスを一瞬で完全回復させる。

「おおっ！ 勇者から受けた傷が一切消えて無くなった!?!」

体中にあちこちあった傷がカサブタの1つすら残らず綺麗さっぱりと消えて無くなった。

この世界にも回復魔法はあるにはあるのだが、並の者で切り傷1つすら癒すのに数分はかかり、最上級者と呼ばれるような聖人や聖女ですらこれほどまでの重症を癒すのはおおよそ2週間以上はかかるだろう。

だが、そんなキララの回復チートをもってしてもハドスの胸に刻み込まれた聖刻印章は消えてはいなかった。

「ふむ、傷の方は全て癒すことは出来たが、その胸に刻み込まれた奇妙な物は取り除くことは出来なんだか……」

小癪など言わんばかりに、バドスの胸に刻まれている紋章を睨みつけるキララだったが、どうしたものかと少し考えると、よし！ と声を出して手に魔力を込めてバドスに声を掛けようとしたその時だった。

「遅ればせながら、キララ様。ご命令通りに新生魔王軍全幹部の招集を完了させました！」

天井からヌルリといった感じで登場したのは先程廊下ですれ違って別れたヒルキアだった。

「ふん、貴様かヒルキアよ。随分と早かったではないか」

折角の2人きりという状況を早々に壊された為に、バドスは少し不機嫌そうにヒルキアに対して言葉を吐く。

「ンツフツフ、あんまりモタモタしているとバドス君がやましくい気持ちでキララ様は何をするか分かったもんじゃないからね。大急ぎで幹部の招集を終えたのさ」

「んなっ!？」

心外だと言わんばかりに顔を歪めるバドスだが、2人きりで話したいという思いも無かった訳ではなかったので反論は出来ずにいた。

そのすぐ後、ヒルキアの後ろから続々と新生魔王軍の幹部たちが姿を現してきた。

「ぶあつはっはっ!! バドス様、このアルダードト! ご命令通りに全幹部を招集しましたぞ!」

『新生魔王軍 “6大魔将” 混獣王アルダードト』

ヒルキアの後ろから一番最初に現れたのは招集を手伝うようにと命じたアルダードトだった。

どうやら相当にヒルキアと一緒に行動するのが嫌なようで、バドスの思いを汲み取ることなく文字通り全力で幹部招集をやり遂げたのだろう。

「キララ様と2人きりになろうと企んでいたようだが、狙いが裏目に出たな。アルダードトの奴め、自分の部下をかき集めて速攻で俺達を呼びに来たぞ」

『新生魔王軍 “6大魔将” 影の支配者アウラ』

更にアルダードトの後ろから先程別れたアウラが姿を見せる。

その顔にはしてやったりといった感情や貴様一人だけにおいしい思いをさせてたまるかといった心情が読み取れる。

「やれやれ、仲間うちで喧嘩とはな。キララ様の機嫌を損なわれぬ範囲でするならばよいが、もしキララ様をご不快にさせるような事態にまで発展すれば——ツ!!!」

『新生魔王軍』6大魔将 邪光龍デオドラン』

強烈かつ凶悪なまでの殺気で脅しをかけてくるのは、新生魔王軍でも屈指の戦闘力を誇る世界でも数少ない龍種のウチの1体。

本来は褐赤の鱗を纏った巨大な龍の姿をしているのだが、魔王城の室内ということもあり、現在は魔法で赤黒色の髪をした男に変身している。

普段は太陽を思わせる温厚さを見せる性格ではあるが、恩人であり敬愛するキララの事になるとその態度は豹変し、邪龍並の殺意と悪意で襲い掛かって来るのは幹部の中では常識であった。

「デオドラン！ 貴様もいちいち熱くなって殺気を漏らすな。キララ様の御前だぞ!!」

『新生魔王軍』6大魔将 竜殺しの魔槍士リヨーマ』

イライラを隠そうとせずに床に自慢の魔槍を叩き付けながら不愉快な殺気を放ち続けているデオドランに悪意をぶつけるのは、龍という生物に対して相性最悪とも呼べる存在。

かつて龍と人とは混じり合って生まれし神に愛された神秘の一族である竜人族の里を壊滅させた恐るべき男。

その手に持つ槍はかつては竜人族の秘宝と崇められし神聖な物であったが、幾人もの竜人族の血と悲鳴を吸込み魔槍と化したものだ。

「リョーマの言う通りだ。キララ様の為とはいえ、その殺気は少々考えなしの愚行と吐き捨てねばなるまい」

『新生魔王軍 “6大魔将” 裏切りの英雄エピタス』

炎と牙を模した大剣を背負った色黒の優男のような風貌だが、その身に秘められた力はこの場にいる誰よりも力強く禍々しさを放っている。

その反面、常に人当たりの良い笑みを浮かべているのが逆に恐ろしさを醸し出している。

「我らが女王たるキララ様の元に強者であれど愚物は不要、いつそのこと死んでみますか？」

『新生魔王軍 “6大魔将” 堕ちた魔精霊ラーク』

その見た目は童話に登場する湖の女神のような容姿だが、その目は毒々しく、美しい髪もその色は灰をかぶせられたかのように色褪せたような色をしていた。

とはいえ、その姿が逆に妖艶さを醸し出しており、そこいらの男どもなら一目で心奪われてしまうだろうが、その口から発せられる茨のごとく棘のある言葉に撃沈されるだろう。

唯一の例外と言えば彼女の今の生き甲斐であり、崇拜の領域に立つキララぐらいだ。

「ふふ、こうして見ると壮観だな。この世界で指折りの実力者たちが一堂に会して私の

前に立っているのだからな」

「光栄なお言葉をありがとうございますキララ様。ですが我々などが東になっても敵わない強さと美しさの頂点にあらせられるキララ様のお姿と比べられたら雲泥の差でございましょう」

「しかし、エピタスの言う通りですな！　我ら程度の集まりなどキララ様の至高のお姿と比べられたならばとてもとても!!」

「そ、そうか？　そう言ってくれるのは嬉しいところだが、あまり持ち上げすぎるな恥ずかしい／＼／」

エピタスとアルダートの褒め言葉の返しに他の幹部たちもウンウンと無言で首を縦に振って肯定し、キララも周りからの賛美に困惑しながらも赤らめた照れ顔を腕で中途半端に隠す仕草に、その場にいた全員が無意識に微笑みを浮かべる。

「おっほん！　私を褒めて持ち上げてくれるのは嬉しいが、そろそろ本題の方に移ろう。……の前に、バドス貴様の胸につけられたそれを外すでしょうか」

誤魔化すように話題を変えるようにバドスの胸につけられたソレを指さす。

「あれ〜？　バドス君まだその胸のやつをどうにかしてもらってないんだ〜？」

ん〜？　つと覗き込むようにしてくるヒルキアを鬱陶しそうに睨みつけるバドスだが、それを無視してバドスの胸につけられた聖刻印章を解除しようと動き出したキララ

に待ったをかける。

「お待ちくださいキララ様！ そのお心遣いに感謝の意を捧げたいとございますが、この胸の聖刻印章を消すのは少しばかりお待ちくださいませぬか!?」

「「「「「」」」」」

バドスがキララからの善意を拒絶した瞬間に、6大魔将全員から凍てつくような殺意を向けられる。

あのバドスに忠誠を誓っているアルダートですら他の5人と変わらない殺気を送っていることから、それが新生魔王軍にとってどれだけの無礼な行為かは見当がつくだろう。

「はあ、これお前たち少しは殺気を押さえんか。息がつかまってしまおうわ」

（いや、皆の殺気が怖いんだけども〜）

「「「「「も、申し訳ございません!!」」」」」

「「「「「っ」」」」」

キララの鶴の一声によつて6大魔将全員が謝罪と共に殺気を引つ込める。

だが、6大魔将全員の殺気によつて針の筵となっていたバドスはそのことに安堵するどころか、その顔色を悪くする。

もしキララ様の機嫌を損ねたということで見限られでもしたらと脳裏にチラついた

最悪な未来を想像し、殺気を向けられても微動だにしなかった手足が震えだす。

「——そう震える必要はない。私はお前に対して失望や落胆といった想いは抱いてはない。だが、1つ聞くべきことがある。これは私はあまり気にはしてはいないが、他の者達が気にしているだろうから……」

キララはバドスを取り囲む6大魔將を見渡しながら、また先程のように殺気を放たないか、あるいは抑えきれずに飛び掛からないか不安になりながらバドスに問い掛ける。

そして、肝心のバドスは失望や落胆していないというキララの言葉に内心で安堵し、ホツと息を吐いて手足の震えを止めてキララからの次の言葉に耳を傾ける。

「では聞こうか、その胸に刻まれし聖刻印章を消すのを何故止めた？ それは貴様は当然として我らにとって百害あつて一利なしの代物だ。そんなものを捨て置く理由を聞かせよ」

「——こ、これは、我がライバルである勇者が残した最後のもの。私はかつて奴に1度敗れました。続いての再戦は必殺技の撃ち合いに負けて2敗し、最後は奴を討つこと敵いましたが、私と奴との戦績は1勝2敗と負けております。これは、私のプライドの問題。いかような処分もお受けします。ですから、この奴が残した聖刻印章は私の手自らで解除したいのです!!」

そう言つて顔を上げるバドスの覇気にキララは納得がいったが、キララ以外の全員は

納得した様子は見せず、先程よりもずっと重圧的なまでの殺気がバドスを襲う。

「——つぐ」

先程とは桁違いの殺気に物理的な圧さえ感じて体が軋みを上げる。

こちらに対抗しようとすれば殺気如きで苦悶の声を上げることは無いのだが、逆の立場ならば自分も同じようにしただろう。

それ故に抵抗らしいものは一切せず、6大魔将全員からの制裁代わりの殺気を甘んじて受け入れている。

「もうよせお前たち……………」

「しかしキララ様!? 奴は軍よりも自らを優先させている! 仮ではございますが、キララ様の代わりを務める男がその責任を放棄してプライドを優先するなど言語道断か
と!!」

「しかり!! エピタスの言う通りかと!! いくらバドス様といえどその責任の放棄は厳罰を受けなければありますまい!!」

「俺も2人の意見に賛成です。組織よりも個を優先する者をトップに立たせる気はこの場にいる全員が許しません。なにより、キララ様の善意を己のプライドが理由と言うだけで拒否することが何よりも許せん!!」

「ああ、そうだな。罰ならば我が牙で刺し貫いてやろうか!」

「まったくだ。俺様の槍で串刺しにして吊し上げも一興だろう」

「貴様の首を跳ね飛ばし○○○した後に○○○に漬け込んで○○○してくれようぞ!!!」

6 大魔将全員がバドスの嚴罰を望んでいるようで、殺氣と怒氣の入り混じった声でバドスを非難しながらキララに意見する。

特に口の悪い魔精霊のラークは思わず伏せ字にしななければいけない罵詈雑言を並べ立てており、いくらキララといえどちよつとやそつとの弁護ではどうにもできそうになり霧囲気であつた。

「ンンン！ ならボクちゃんにいいアイデアがあるよ」

この悪い霧囲気を断ち切るようにいつの間にかバドスの頭上の天井に逆さまに張り付けていたヒルキアが声を出して皆の注目を集める。

「確かに今のバドス君の発言はちよつとばかしの騒ぎじゃないくらいに不忠義なものだつたよね。でも、そのプライドの高さがバドスのいいところの1つじゃないか。それを皆で寄つてたかつて攻めたてるのは可哀想だよ」

そう言つて天井から飛び降りてバドスの目の前に立つと、サーカスのピエロのように目立つYのポーズで再びその場の全員の注目を集める。

そして、指を1本立てて嚴罰代わりの提案を提案する。

「皆ももうすでにこの場に集められた時からなんとなくこの場に集められた理由を察

したんじゃない？」

「「「「ツツツツツ!!!」」」」

その言葉の意味をその場にいる全員が理解する。

「そうか、気づいていたか。なら後にしておく理由もなし、皆をこの場に招集した訳を話すでしょうか。バドスが勇者討伐に成功したのは既に皆知るところだろう。これによつて私たちの世界征服の最大の障害は排除できた！」

「「「「おお!! それではついに!!」」」」

「ああ、本日をもつて我ら新生魔王軍の存在を世に広め、世界征服を実現する！」

キララの号令に拳を握る者、武器を掴みあげる者、自らの魔力を高め上げる者、それぞれ口には出さないがやる気に満ちているのは確かだった。

「そ・こ・で♪ 少し前の話に戻るけど、バドス君への罰のお話しなだけどね？ 彼には単独での国墮としを達成してもらおうとしよう」

ヒルキアはニツコリと微笑みながらバドスへの罰を提案する。

だが、その提案した内容は過酷と評せざるを得ないだろう。

勇者討伐前の万全な状態ならばその程度と鼻で笑い飛ばせていただろうが、勇者につけられた聖刻印章が重すぎるハンデによつて達成できるか怪しいものとなっている。

しかも、ヒルキアは指を2本立てていることから、墮とす国は1つではなく2つとい

う意味だろう。

「なるほど、いい提案だな。皆もヒルキアの提案に賛同でよいな？」

「「「「「……………」」」」」

流石にキララからヒルキアの提案を受け入れると言われれば多少の不満はあれど首を縦に振らざるを得ないだろう。

皆は納得がいかなないながらも、仕方なしの折衷案として無言でその提案を受け入れる。

「ふふふ、私の我儘を受け入れてくれてありがとう。皆にもそれぞれ言いたいことはあるかもしれないだろうが、その思いは全てが終わってからにしてくれないか？」

「我らの思いなど、キララ様の為なれば幾らでも蓋をする所存でございます」

「そう言うなエピタス。私の我儘を無理に聞く必要などない」

慈母のように微笑みを浮かべてエピタスの言葉を否定する。

「それじゃあ、皆が征服する国の指示は後で使いを向かわせる。それでは解散ね♪」

ニツコリと笑みを浮かべてパン！ と手を叩くと、次の瞬間にはキララの姿が玉座から消えていた。

それはつまり、この場にいた誰もがキララの動きを目で追えていなかったということになる。

「ンツフツフ♪ 流石はキララ様だね。今のはどうやって移動したんだろうね？ 一瞬
凄い風を感じたから魔法じゃなく物理的な移動をしたとは思うけど、ボクの目からじゃ
影すら捉えることが出来なかったよ」

「当たり前だ。キララ様は異世界より参られし神のような御方だ。我ら程度の存在があ
の方の力量を推し量ることなど不敬ですらある」

「だな。さて、これ以上ここにいてもしょうがあるまい。俺は自らの部屋で指示を待つ。
お前たちもいつでも出撃が出来るように部下に準備でもさせておくんだな」

そう言うときアウラは影に沈んでいきこの場を去っていった。

「俺もアウラの言う通り部下に進軍の準備をさせておこう。万が一の事態に合わぬよう
に万全の備えをしておいて損はないからな！」

それに続いてアルダートも自身の部下に指示出しをするべく歩いて去っていった。

「なら私ももう出ていくわ。キララ様がいなくなつたこの場に用はないもの。けどバド
ス!! あんたがした事は絶対に忘れないからね。もし次あんな事をすればテメエの
○○○^ビを○○○^ビした後に○○○^ビするからな!!」

とても字に記すことが出来ないほどの罵詈雑言を並べ立ててラークは自身の体を霧
のように変えて消えていった。

「ふん、俺もとつとと帰らせてもらおう」

「まつ……………」

「……………？　なんだ、何か言いたいことでもあるのかバドス？」

「……………いや、何でもない。忘れてくれ」

リヨーマにあの時殺した勇者の弟子のガキが纏っていたオーラの事を伝えようかとしたが、わざわざ殺した見間違えかもしれない相手のこと等を話しても意味はないと考えて口を閉ざした。

「そうか。俺からも言う必要はねえと思うが、キララ様にあんな大口を叩いたんだ精々その体で国2つを墮としてみせるんだな」

そうやってリヨーマなりの皮肉混じりの激励を飛ばして去っていった。

そして最終的にこの場に残ったのはバドスを含めて3人のみとなった。

「ソッフツフ♪　ボクは情報&暗殺を担当する部隊だから国盗りの為に準備する必要はないけど、君たちは戻って準備しなくていいの？」

「僕は配下の竜には既に念話でいつでも動けるようにと号令を飛ばしておいたわ」

「俺は部下を持つてはいないからな。それに、いつでも常在戦場の心得で生きている。

問題はない」

「どうやらデオドランとエピタスの2人の準備の方は既に万全のようだ。

こうなると後この場に残るはただ1人のみ——

「こうなると残る心配はバドス君のみだけど………」

「ふっ、私の心配か？ 貴様ごときが随分と舐めた口を叩くものだ！」

ヒルキアの心配を鼻で笑うように、ハッ！ とバドスが闘気を爆発的に高める。

すると、胸に刻まれた聖刻印章が光輝いてゆき、高まるバドスの闘気をかき乱さんとする。

「コオオオオオ——」

そんな聖刻印章に対抗して、バドスは高めた闘気を全身に霧散させるように薄く張り巡らせながら、かき乱される箇所には闘気を受け流すように操ってゆく。

が、それだけでは聖刻印章を完全に攻略したとは言いがたい。現に、闘気を全体に広げてしまった為に、紋章の力がバドスの全身を侵食せんと広がろうとする。

「ハアアアアア!!!」

っが、その程度のことはバドスも理解できている。それに対抗するために、闘気と同時に関章を押さえつける為の魔力を解放する。

すると、紋章はバドスの闇の魔力を押さえつけんと侵食を止めて刻まれている胸へと集中する。

「ほお……、なるほどなるほど、あの紋章の効果は対象のエネルギーを5種類の属性エネルギーの力技で抑え込んでかき乱す代物。とはいえ、所詮はただ高性能なだけの力技な

だけで、刻み込まれた部分を中心にしか効果は発揮できない。ならばこそ、全身に高めた闘気を張り巡らせつつ、その闘気をかき乱されぬように緻密な操作で紋章の効果が出る箇所を避けてゆきながら、紋章の力は魔力で封じ込める。口で言うのは単純だけど、闘気と魔力の2つの力を完璧にコントロールしてみせるなんて、世界でも出来る奴らを数えるなんか両手の指の数だけで事足りる難易度だよ」

バドスがしてみせた事を丁寧に解説しながら、そのやってみせたことの難易度の高さに驚愕の声を上げる。

「我を誰だと思っている。かつては世界を侵略せんとした元魔王にして、キララ様の右腕たる存在であるぞ！」

不敵に笑みを浮かべるバドスは拳を強く握ってヒルキアを睨み上げる。

「確かに、これならボクが心配する必要性は無いようだね。無粋なことをしてしまつて謝罪するよ」

ヒルキアは舞台の俳優がするかのよう優雅に頭を下げて謝罪を行う。

「ふん、貴様から出てくる薄っぺらい謝罪の言葉などいらんわ！」

そう言うバドスはそうそうにこの場から去つてゆき、自身に与えられた一室でドリと高級そうな椅子に座り込む。

「ふん、ヒルキアにああは言ったが、この状態を戦闘中も維持できるほどの技量はまだ我

は持ち合わせてはおらぬ。それに、これでは解除とはとてもではないが言えぬしな」
更なる強さを得ねばならない。そう思いながら部下が侵略予定の国の情報を持ってくるまで勇者との戦いで滾った感情を落ち着かせようとゆっくりと目を閉じて眠りにつく。



元魔王と新生魔王軍の幹部である6大魔将たちとの会議——というより謁見かな？ が終わり、速攻でその場から物理的に走って……いや、飛んでの方がピッタリくるか。

まあ、なんやかんやあってあの場から一目散に逃げ帰った大魔王様ポジションの私なんですが……、一言だけ言わしてください。

「本当にどうしてこうなったなよおおお!!!」

自分の部屋にあるベッドの上で枕に顔を埋めながら自身の心情を大声で叫び散らかす。

今の彼女の心情はまさか本当に勇者を倒しちゃうなんて！ という思いと、生きて帰ってきてくれて本当に良かったという思いだった。

当初は魔王なんていう厄介な存在には近付きたくはなかったのが、この世界に来て数年の月日が経ち、この世界のアレコレを知った今となっては新生魔王軍なんてものを建設し、世界各地で知り合った強者と呼べる彼らを幹部という立場を用意して加入してもらった。

当初はこの世界をひっくり返す為のお手伝いをしてくれないかな〜っていう気持ちでお誘いをしたのだが……。

「「「「その言葉お待ちしておりました!!」「」」」」

まさか、全員が全員ともこつちがちよつと引いてしまいうらうの忠誠を誓ってくるのだから驚きだ。

ねえ、神様ちよつと聞いていい？ 貰った2つの特典以外にもなんか別のチート能力授けてませんか？ 具体的にはチャームだとかカリスマ（笑）みたいなものを。

ここまでくると自分が他にもそんな精神干渉系のチートを持っているじやと疑いたくなくなる。

まあ、今では彼らは自分にとってかけがえない大切な仲間だ。

ただ、多少その高さすぎる忠誠心に心労を抱かせられるのが難点だ。

「はあ〜」

とはいえ、それはそれこれはこれと言った感じで、どの国に誰をぶつけるかが問題だ。溜息をつけてゴロゴロと無駄に広いベットの足を転げまわりながら部下の事とこれからのことで悩みながらウーンウーンと唸り声を上げる。

「まったく、これから世界を征服しようとする者が、ベッドの上で唸り声を上げてゴロゴロと転がるのはおやめください」

私が1人だと思つて、普段の皆には決して見せられないような行動をしていると、耳の痛いお小言が飛んできた。

「あつはつは、なんだ居たの？」

「居たの？ ではありません。いつまでもお呼び出しが来ないから、どうせまた1人で考え込んでいるのだろうな〜と思つて来てみれば……。はあ、想像の3倍はだらしない格好でお悩みになって……」

この今の私のだらしない格好にため息を吐いて眉間を押さえるメイドの名前はアイシャ。一見すると人間に見える風貌だが、悪魔の尻尾に小さな羊の角が生えた立派な魔族である。

ちなみに、補足を付け加えると、ボンキュツポンのナイスバディのサキュバスなのだ。「ほら、どうせ幹部の皆様方をどの国へ攻め込ませるか悩んでらしたのでしょ」

懐から取り出したのは各国の情報とそれに適した幹部と侵略作戦がまとめられた書類だった。

ここに書いてある通りにすれば数年と言わずに数ヶ月もあれば世界征服を成し遂げられるのではないかという内容だった。

「流石アイシャだね。これなら問題ないよ」

「ちよ、ちよつとキララ様!？」

ベットから飛び起きて優秀なメイドさんに感謝のハグをする。それに困ったような声を上げるアイシャだったが、その赤く染まった顔を見る限り嫌がってはいないようだ。

とはいえ、このまま抱きつき続けていると威厳が無い! と雷が落ちるのは目に見えるのでそろそろ離れた方がいいだろう。

「さて、もうおふぎけは終わり! それじゃ始めようか、我ら新生魔王軍の世界征服を……!」

自信満々に天に拳をかざして物語の始まりを告げるに相応しいセリフで世界征服の開始を宣言する。

希望の勇者の後継者

勇者とその弟子を始末したと思えばドスが去っていつて数分後のこと、灼熱の業火によって辺り一面焼け野原となった地面の下からモゾモゾと動く何かがあった。

モグラかと思いきや、地面の下から現れたのはなんとバドスの魔法によって焼死したかと思われたホルンだった。

「ぶはっ!! ペっペっペ、口の中にメツチャ土が入っちゃまったぜ。さて、頼むから生きててくれよりユウセイ!」

地面から抜け出して、口の中に入り込んだ土を吐き出し終わるとすぐさま辺りの土で手で掘り返していく。

「——ついた! おい、大丈夫か? しっかりしろリユウセイ!!」

掘り返した地面の下から胸に穴が開いたリユウセイを発見する。

小さく息はしているようだが、このままでは衰弱して死んでしまうかもしれない。

「ちくしょう! なんか、なんかねえか!」

ホルンは腰にぶら下げてあるアイテム袋から今の状況に役立つ物は何かないかと手当たり次第に探す。

「あつ！ これなら……」

アイテム袋から取り出したのは、かつて勇者デイルが火を司る精霊に出会いに行った際に遭遇した神鳥フェニックスの翼から手に入れた羽の1つ。

この世界で最高峰の回復アイテムであるフェニックスの羽。あらゆる傷を癒し、死者すら目を覚まさせるといふ逸話さえ残した伝説のアイテム。

それを何故ホルンが持っているのかというと、この島に来る途中でデイルがいざという時の為にと手持ち最後のそのアイテムを託したのだ。

「頼むー！ これで治ってくれえー！ 神様……」

祈るようにフェニックスの羽をリュウセイの胸の傷に押し当てると、羽は自然と蒼く燃え上がった。

その炎はやがてリュウセイの傷口を焼いていき、ついには全身へと広がっていった。

だが、驚く事にその炎は熱くは無く、まるで幼い頃に陽の下の元で母親に抱きしめられていたかのような、そんな優しい温もりを感じる。

「……つう、（ん）は……」

「つー！ 目が覚めたかよリュウセイ!!」

蒼い炎が消えると、リュウセイが薄っすらと目を見開いて意識を取り戻す。

それを喜んだホルンがガバツ！ と抱きしめて涙を流す。

「お、おい！ どうしたんだよホルン!?」

「うるせえ！ どうしたもこうしたもあるかよ!! オメエあの魔王に変な光線で胸を撃ち抜かれて瀕死の状態だったんだぞ!」

「そこまで言われて思い出した。自分たちは師匠である勇者デイルの敵討ちに失敗して殺されかけたということ。」

「あれ? でも俺たちって確かあいつの炎に飲み込まれたはずじゃ?」

自身の体を確認してみるも、火傷らしい傷もなく胸を貫かれて出来た風穴も存在しなかった。

ホルンの方は多少火傷の跡が残ってはいるが、あの炎に飲み込まれたにしては傷痕が薄く、あれは夢だったのではないかと疑いたくなってしまう。

「バカ野郎! そりゃこの天才ホルン様のお陰よ! あの咄嗟の瞬間に身を守る為に2つの魔法の同時展開を見事やってのけたって訳さ!!」

そう、あの瞬間ホルンは魔王バドスの炎に飲み込まれる直前に2つの魔法を使用したのだ。1つは自身とリュウセイを守る為の土の鎧を形成するアースクリエイト、もう1つはその土の鎧を炎から守る為の氷の棺を作り出すアイスメイクである。

それぞれまったく別の属性魔法をあの一瞬間の間に展開するなど、まさに神業と呼んで然るべき偉業であろう。

「つて、それどころじゃねえよ。お師匠さんは、お師匠さんを探さねえと！」

自分語りに酔っていたホルンだったが、自身の敬愛する師匠である勇者ディールが魔王との戦いで重症を負っていたことを唐突に思い出して周囲を搜索する。

リュウセイも立ち上がって手分けしてディールの搜索を開始する。

「いた！ こつちだよホルン！」

2人が手分けして探した結果、リュウセイが岩陰で倒れ込むディールを発見した。

そこに倒れていたディールは息も絶え絶えで、国中の女性が見惚れていたあの美しかった金髪も老人のような白髪へと変貌していた。

「うっ……、ああ、良かった。2人共生きていたんですね……」

「師匠！ 良かった目を覚ました」

「ああ、けど安心はしてらんねえ。早くその怪我を治さねえと!!」

先ほどリュウセイを治す際に使ったフェニックスの羽は既に燃え尽きてしまつて手持ちに無く、今のディールに効くような回復アイテムの類の物は一切残っていないかつた。

「チクショウ！ 俺のせいだ……、俺が無鉄砲にあいつに戦いを挑んだから……。ホルンの言う通りに隠れてやり過ぎしてれば、師匠に俺を救ったあのアイテムを使うことが出来たのに……」

ボロボロと涙を垂れ流して後悔による自責の念に苛まれる。

そんなリユウセイの頬をディールは力ないその体で優しく触れて、流れる涙を拭う。

「君がそう気に病むことはない。今の俺は既に生命力を使い尽くして肉体も精神もボロボロの状態だ。この状態でフェニックスの羽を使つたとしても、傷が無い死体が出来上がるだけの事。今こうして君たちと話ができてること事態が奇跡のようなものだ」

今にも死にそうだというのに、ディールはニツコリと微笑んでリユウセイの頭を撫でる。

そして、懐から一つのメダルを取り出して、それをリユウセイの胸元にへと押し付ける。

「お師匠さん!? そ……それは……!!!」

「グスツ……、何これ?」

「これは俺の故郷であるロワール王国に代々受け継がれてきた初代勇者ローガンの証だ。世界に危機が迫つた際はその時代の救世主にこのメダルを継承させる。だから、もう戦えない俺ではなく、これからの未来を背負つて立つ、リユウセイ。君がこれを受け継ぐんだ!!」

リユウセイの胸に押し付けられた勇者を示すメダル。未だに見習いの身でこれを受け継ぐことになったリユウセイの心境は戸惑いと重圧であった。

未だ修業も終えておらず、先ほども勇者である師匠と戦い終えてハンデもあった魔王バドスに負けただばかりだ。

もし仮に魔王バドスにまともな傷一つでもつけることが出来ていたのなら、戸惑いはあれど重圧は感じていなかっただろう。

けれど、そんなリユウセイの心境を見透かしたデイルは、ふらつく体で無理矢理立ち上がり、胸に押し付けたメダルをリユウセイに多少無理矢理にでも握らせる。

「いいですか。確かに君はまだまだ未熟者だ。今のままで世界を救えなんて無茶は言わない。だけど、君は進まなければならぬ。今から進む道は険しい茨の道だろう。どれだけの困難と絶望が立ち塞がるかは分からない。けれど、君は一人じゃない。君と共に辛い修業を受けてきたホルンがいる。戦い続けていれば俺の仲間がきつと助けてくれる。世界を救わんとする君と志を同じくするまだ若い戦士ときつと出会える。そして、ホルン」

「は、はい！」

「君は少し自分に自信が無さすぎる。俺の修業を今日まで逃げ出さずにやってこれたんだ、もつと自信を持って困難に立ち向かいなさい。あつ！でも、褒められたり多少上手くいったからといって、調子に乗り過ぎて天狗になつてはいけないよ」

「——っはい！」

困ったような笑みを浮かべながら、ホルンへ師匠としての最後のアドバイスと忠告に、ホルンは濁流のような涙を流して唇を噛みしめながら首を縦に振る。

「そして最後に……つぐ、ハアハア……」

デイルが言葉を紡ぐたびに、はらはらと髪は抜け落ち、肌は枯れ木のように朽ちていく。

本当ならば今すぐに安静にさせなければならぬ。が、それでも、自分がもうすぐで死ぬと分かった上で未来に希望を託そうとするデイルを誰が止められるだろうか。

リュウセイもホルンも勇者デイルとの永遠の別れを悟りながらも、託される意思を受け継ごうと涙をこらえながら話を聞き続ける。

「新生魔王軍はきつと俺の死を皮切りに世界各国に一斉攻撃を開始するだろう。だから君たちはまずここから北西に位置する俺の故郷であるロワール王国に行つて勇者として認めてもらうんだ。そうすればきつとこれからの君たちにとって心強い後ろ盾になつてくれるはずだ……」

もはや呼吸すらまともに出来ない状態だというのに、デイルは勇者として、そして2人の師匠として燃えカスのような体に鞭打つて、膝をつくことなく立ち続けて最後に伝えたいことを話す。

「俺はもうじき死ぬだろう。けれど後悔や絶望はしていない。何故なら俺は君たち2人

をまだ未熟ながらも育てることが出来た。これから先の冒険の旅できつと君たちは成長を繰り返して俺を超えるような人間になるだろう。だから、俺は今この瞬間も満足して死ぬる。……後のことは……任せたぞ……」

「し、師匠？」

「そんな、お……お師匠さん!!!」

最後の最後にリユウセイとホルンの肩を抱き寄せると2人に未来を託し、ディールはこの世を去っていった。

2人の肩を抱き寄せて抱擁してきたディールから、生きている者の命の暖かさというもの完全に消えたことに気づいたリユウセイとホルンは『?だろ……』と口にしながらも、変えようのない現実盛大な涙と悲しみの悲鳴を押さえることが出来ずに爆発する。

「うあああああつっつ!!!」

獣のような泣き声で叫びながら、眠ったように息を引き取ったディールの強く抱きしめる。

やがて流す涙も涸れ果てた2人は死体となったディールを島で一番陽の当たる綺麗な景色の中央に埋めて墓を建てた。

「それじゃ師匠。俺勇者として精一杯頑張って世界を救ってみせるよ」

「俺も兄弟子としてしっかりリュウセイのやつを支えてやるからさ、お師匠さんも安心してこっから見守ってくれよな」

目を閉じて黙禱を済ますと、2人は恩師の墓を背にロワール王国へ向けて旅を始める。